

教育評価の現状と課題

上越教育大学学校教育総合研究センター 濁川 明男

I 絶対評価の導入と教育現場の動向

平成12年12月の教育課程審議会「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方」(答申)は、「生きる力」の育成を目指すうえで、基礎・基本はもちろん、従来から提示されてきた観点別評価の「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の4観点から評価を充実させていく必要があることを指摘している。そのためには、指導と評価の一体化が大切であり、評価が学習の改善に役立つためには、日常的に通信簿や面談を通じて、児童・生徒や保護者に十分説明し、児童・生徒や保護者と共有していくことが大切とされた。

渋谷(2002)は、雑誌『教職研修』のなかで、従来の相対評価は集団に準拠し、水平的尺度であったのに対し、絶対評価は目標に準拠した鉛直的尺度での評価であるとし、これまでも観点別評価は行われてきたが、教育現場でそれほど成果を上げられなかったのは、評価基準が授業レベルまでおろされていなかったことによると指摘している。

絶対評価の導入が決定されて、2002年2月に国立教育政策研究所から「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料」が出され、各校では県教育委員会の通知を受け、観点別評価の進め方、絶対評価の算出方法の検討に入った。全国校長会も評価モデル案を提示し、市町村教育委員会も各校代表を集め、共通な方向性を見出す検討に入った。

II 中学校の絶対評価の現状と課題

筆者は近隣の8校の中学校の観点別評価と絶対評価の実際について聞き取り調査を行ったので、中学校に限定してその現状と課題について述べる。

各校とも教科の単元内容に即して観点別評価のための評価規準の作成を行った。どの学校もその評価規準に基づき、日常の学習を通して評価データを蓄積していき、学期ごとに観点別評価を集計して、それを段階評定するとともに数値換算し、カッティングポイントを定めて絶対評価を行うというものである。

(1) 導入による成果

- ・従来から変わろうとしてこなかった中学校の中間・期末テスト一辺倒の傾向に変化が見られてきた。基礎・基本の確かな定着が指摘されたこともあり、多くの学校では中間テストを廃止し、単元ごとに確認テストを導入し、少なくとも日常的に評価をしていこうとする動きがみられてきた。
- ・単元レベルでの評価規準が作成されたことで、テスト一辺倒でなく多角的な視点からの評価を試みようとする努力がなされてきている。

(2) 克服されねばならない課題

① 評価データの蓄積に関して

観点別評価を何をもってデータとして蓄積していくかということについて、A校の理科を例に見るならば、自然事象への関心・意欲・態度：授業中の様子、ノート、提出物、科学的な思考：実験レポート、確認テスト、観察・実験の技能・表現：実験レポート、自然事象についての知識・理解：小単元テスト、確認テストとしている。これらの内容は、従来でも平常点として評価に加味してきたことで、何らの改善点を見ることはできない。また、B校の理科ではほぼA校と同様の内容でパソコンを利用してデータ集積を図ろうとした。しかし、学期末になって開いてみたところテスト結果以外の入力が教師によってちぐはぐで、補助簿としての機能を果たさず主任は真っ青になったという。

② 評価のための評価の傾向

大半の教師は「やらねばならないからやる」「学期末は膨大な事務量で、授業そのものは二の次です」と発言している。C校の3学年の1学期末の家庭への通知は20ページに及んだ。「通知ファイルの見方」「観点別評価の評価の方法」「絶対評価の算出方法」「定期テストの結果表」「学期毎の学習の所見」「学期毎の学校生活（総合的学習の所見，特別活動の記録，学校生活の所見，出席状況等）」「学力定着度テストの一覧表」「NRTの結果」「教科，総合，学校生活に関する自己評価」「模擬試験結果」等であり，それによって保護者の72%からおおむね満足という評価を得たという。3年生は模擬テストでの相対評価結果があるのでとくに反論はなかったが，1，2学年の保護者の中には相対評価を求める声が多かったという。また，パソコンで打ち出した所見に対して，「手書きの温かみを」という保護者の意見もあったが，事務量を考えると時間的にむずかしいとのことである。

③CRT結果と自校の評価との差異

D校ではある観点別評価項目に25名のAを出したが，CRTではAは5名という結果となったという。自校で力を入れてきたことによる評価と，CRTの出題内容との差異による結果によるものであろうが，CRTを客観視する傾向が強いために学校の独自性が失われていくのではないかと悩んでいるという。

Ⅲ 評価と指導の一体化を図るために

(1) 学習意欲を引き出す評価の導入

評価の方法がテスト中心の域を超えず，どうしても知識・理解が中心になっている。筆者の乏しい経験の中から少しでも多面的な評価の必要性を提言したい。

①パフォーマンステストの導入

単元導入時に身につけてほしい技能をプリントや掲示によって課題として提示しておくことで，意欲的な学習姿勢を見ることができる。具体的には，ガスバーナの点火操作に始まり，回路の電圧・電流測定技能，基本的な岩石の分類，顕微鏡操作等々である。その操作技能が修得できれば技能としての

定着は十分であり、事前に示しておくことで実験観察への学習意欲はきわめて高いものとなる。回路の電圧・電流測定パフォーマンステストでは、科学部生徒を使いながら同時に5名の操作テストを行うことで、追試を入れても40分前後で終了することが出来る。規定時間内に出来た生徒全員には、当然、A評定が出される。事前に課題が示されることで実験中の傍観者はなくなり、放課後等にも取り組む姿も見られるようになる。

②記述テストや面接による評価の導入

植物の光合成の学習後も、「植物は昼間光合成して、夜は呼吸する」と考える生徒はいる。「100V-100W」と「100V-40W」の電球はどちらが内部抵抗が大きいかという問いに、学習後でも100Wと回答する生徒はいる。生命活動の本質、電力概念がきちんと定着していないのである。筆者は使用する用語を示したうえで、「植物はどのようにして生きているか」を題材に自由記述させたり、面接によってどちらが抵抗が大きいかを問い、その考え方を探る評価も行ってきた。自らの指導のあり方を内省するとともに、生徒に学習を再度振り返らせる個別の機会として有効に機能した。

③評価規準の共有

単元導入に当たって、評価規準を内容に即して具体的な形で生徒に示すことで、学習目標の意識化や学習意欲を高めることも有効である。このことに対して、討論では「問題意識を醸成し、追究活動を通して問題解決することが大切で、評価規準の事前提示は、それだけ学べばよしとする安易さを生むのではないか」との指摘があった。探求の過程を重視する理科においては、知識・理解面にそのような問題もあるが、前述したパフォーマンステストによる技能面、さらには国語や英語等の教科では到達目標を意識させることで学習意欲は効果的に高まる。たとえば、関係代名詞のWhoについて、2文を関係代名詞を用いて1文にすることや、関係代名詞を用いて和文英訳等が書ける、言えるを、例題をもって示しておくことで、学習後の自己評価も客観性を持つとともに、達成感にもつながるといえよう。

(2) 評価と指導の一体化を生む教師の創意

教師主導で教科書どおり教えるだけの授業では、相対評価であろうが絶対

評価であろうが、生徒をランク付けするだけの意味しか持たない。教師自身が指導方法の工夫や教材の開発、学習過程の改善等を行ったときには、必然的に教師自身が評価をしたくなるといっても過言ではないだろう。

筆者は中学校理科1年で、それまで知的教え込みを行ってきた恒温動物、変温動物について、実際にニワトリ、人、ウシガエル、イグアナ等をサーミスター温度計を用いて、外気温を変化させつつ、体温を測定する学習を構想した。どの教師に聞いても実験したことはないという内容であった。導入は各種動物の過酷な冬の生活を焦点をあて、冬眠という意見を引き出し、体温問題に焦点を当てて実験に入る。また、実験後は渡りや魚が深みで越冬する意味を考えさせる構想を練った。当然、生徒のこの学習への関心・意欲・態度はもとより、実験を契機にその後の課題での思考・判断にも大きい期待があった。だから、学習中の一人ひとりの学習態度に関心を払い、自己評価も併用して自ら思考判断できたかを評価しようとした。また、期末テストでは思考・判断力を見るために、「地球の極地方ではなぜペンギンや海獣類しか生息していないのか、あなたの考えを述べなさい。」を出題した。

(3) 自己評価を大切に

上記のように教師の創意が発揮された授業後の観点別評価を踏まえた自己評価では、生徒自身も自らの学習姿勢に高い評価を与えるものである。それは教師自身が自信に満ちて生徒の前に立ち、その勢いが生徒に伝播していく要因も大きい。そのような評価では生徒はやれる自分を自覚する。一方、塾と変わらぬ授業での自己評価では、真剣に取り組まなくとも結果のみ吸収すればよいと意欲は低下し、結果も低い値しか得られない。ましてや、評価の必要性を教師自身が実感しないことになる。指導と評価の一体化とはいうが、その根底にはその授業にかける教師自身の創意があるかないかで大きく左右されると考える。